

通常の学級に在籍する発達障害のある小学5年のA児への合理的配慮の提供事例

1. 事例の概要

通常の学級に在籍している広汎性発達障害のある小学5年のA児について、教員と保護者が合意形成をはかりながら、合理的配慮を提供した事例である。A児の学習成績は良く、自分の思いも論理的に述べることができる。しかし、自分の思いをコントロールすることが苦手で話し出すと止まらなくなる。また、思いが通じないと暴言をはいたり暴力をふるったりすることがある。気分が高まったときのことを覚えていないことがたびたびある等生活態度に課題があった。保護者との関係作りとして、連絡帳や電話、教育相談等でA児のがんばりを伝える取組を行った。またA児との関係作りとして、安心して学校での生活を送ることができるよう、スキンシップによる安心感、エネルギーの発散、満足感を得ることができるようにした。A児が「当たり前」と思っていることと周囲が思っているズレを小さくしていくことをA児と確認した。どこが周囲とのズレなのかを理論的に説明するようにし、学級内で起きたトラブルも含め他の問題も全体の問題として捉え学級全体で話し合い、解決策もできるだけ自分たちで決めるようにした。この取組を継続してつみあげていくことにより、「なぜ」「どこを」「どのように」改善していけば良いかがA児にも分かるようになりつつある。

キーワード 広汎性発達障害、規範意識、学級全体、自尊心

2. 児童の実態

A児は通常の学級に在籍する小学5年で、学習能力は高い。計算も素早くでき、漢字も正しく書け、自分の思いも論理的に述べるができる。しかし、自分の思いをコントロールすることが苦手で、一度話し出すと止まらなくなる。また、思いが通じないと暴言をはいたり暴力をふるったりする。気分が高まったときのことを覚えていないことがたびたびある。学習はすべて通常の学級で行っている。

3. 本事例に関する基礎的環境整備

- A児の担任が以前、特別支援学校に勤務していたこともあり、障害のある児童とのかかわりや指導も経験している。また、高学年部の部会や日常的な教員同士の話し合いの中で、高学年部所属の特別支援学級教員とも連携しながら指導を行っている。また、必要に応じてメール等で大学教員とも連携し日々の指導に生かすことができる。【基礎2】
- 広汎性発達障害に関する知識と指導経験をある程度持った教員が、主となって担当児童を指導した。【基礎6】
- 本校では特別支援学級と同学年集団での学校行事や普段の生活を通して交流を行っている。【基礎8】

4. 合意形成のプロセス

低学年からのA児の様子について、担任が教育相談で保護者より相談を受ける。また、担任も課題を感じていたことから、今後担任と連携を図りながら家庭と学校とで取り組んでいくことを確認する。具体的な合理的配慮の内容については、保護者と検討し、その都度、合意形成をしながら取り組んだ。担任は学年部または全体の会議等でその内容を報告し、必要に応じて、特別支援教育を専門とする有識者（大学の教員）とも連携しながら取組を進めていった。

5. 合理的配慮の実際

- A児は、午後になると集中力が極端に落ち、情報が入りにくくなる特性がある。そのため、午後の学習活動においては、社会科等でビデオ等の視聴覚教材を用いたり、体育や家庭科等活動的な学習活動を設定したりした。また、A児の知的な好奇心を刺激する教材も用いた。こうすることで学習に集中しやすく積極的に他の児童とかかわろうとする姿が多く見られた。【合理①－2－1】
- 自分の行動面に対する自尊心が低いA児だが、A児の学習面における努力を認め、また、もともともっているA児の優しさを学級全体に教師が事例を交えて紹介することで、生活面での自尊心の回復を図った。【合理①－2－3】
- 学級内の児童には、A児は何が得意で、何が不得意かをA児と保護者に了解を得て、きちんと説明した。そして、お互いの不得意な面をみんなで認め合う雰囲気をつくった。また、それと同時に、それぞれの児童の長所が、学級全体にとってよい影響を及ぼし、必要不可欠なものとなった。【合理②－2】

6. 本事例の成果と課題

学級内の児童には、A児は何が得意で、何が不得意かを保護者に了解を得て、きちんと説明した。得意不得意は誰にでもあり、特別なことではないことも説明した。A児に限らず、誰かが不得意なことで困っていたら周りが支えていこうということをクラス全員に働きかけて伝えた。これにより、不得意な面をみんなで支えていくという、受容的な雰囲気を作ることができた。

A児のみに限ることなく困っている友だちがいたら支えていこうということがクラス全体で確認できたことが成果である。

今後は、校内職員研修等を通して具体的事例を取り上げつつ、それぞれのクラスにいる気になる児童の様子に対してどのような支援を行っていけばよいか等を低・中・高学年部の3グループに分かれて実践検証していくことで、各教員が目の前にいる児童一人一人の様子をよりこまめに見ていくことで、必要な支援を行い、合理的配慮につなげていくことができるようにしていく必要がある。